

おしゃべりコーナー

(目次)

< 今月の歌 >

「[椰子の実](#)」

(竹の台・米田哲夫)

< ショート・ショート >

「[悲しい酒](#)」

(春日台・大西 No.18)

< 西神の花 >

「[スイセン](#)」

(竹の台・タイガー)

< 今月の歌 >

『椰子の実』

作詞：島崎藤村(1900年)

作曲：大中寅二(1936年) NHK 国民歌謡

<https://youtu.be/1Cgu7JTED-g?si=r-HC1glqYQFVLa2v>



島崎藤村は、明治の近代化の中で悩み苦しんだ青山半蔵を描いた小説「夜明け前」が有名ですが、「千曲川旅情の歌」「初恋」などの美しい詩歌も残しています。

馬籠、千曲川は何度か訪れ、この歌の舞台である伊良湖岬も旅しました。

「椰子の実」はメロディと並んで、その優れた詩歌が親しみやすく、口ずさみたくなります。

いつも自転車の乗って、歌っています。

♪ 名も知らぬ 遠き島より
流れ寄る 椰子の実一つ

故郷の岸を 離れて
汝(なれ)はそも 波に幾月

♪ 旧(もと)の樹は 生(お)ひや茂れる
枝はなほ 影をやなせる

われもまた 渚を枕
孤身(ひとりみ)の浮寝(うきね)の旅ぞ

♪ 実をとりて 胸にあつれば
新(あらた)なり 流離(りゅうり)の憂(うれい)

海の日 沈むを見れば
激(たぎ)り落つ 異郷の涙

思ひやる 八重の汐々(しおじお)
いづれの日にか 国に帰らん

(竹の台 米田哲夫)

[目次へ](#)

<ショート・ショート> ちょっとした気づきやつがやき・・・

「悲しい酒」

出張先の居酒屋で熱燗を頼んだら、店の主人が1本の一升瓶をカウンターに置いてくれた。

伏見の酒のラベルを見て驚いてしまった。

半月前に亡くなった友人の名前と同じだった。訃報を知らされて、気持ちが落ち着かなかった頃だ。

梅田のガード下の焼き鳥屋で飲んで、憑かれたようにハシゴ酒をし、自宅に倒れこむような酒飲みであった。

深酒をして階段から転げ落ち、大怪我をしたこともあった。

あの世では、どんなに飲んでももう足がもつれることはない。足はないのだ。

酒飲みは往生しても酒を飲みたがる。

酒飲みは悲しい。 献盃



(春日台・大西 No.18)

[目次へ](#)

< 西神の花 >

「スイセン」

早春の季節、西神ニュータウンのお庭では、日陰で寒風に堪えて咲くスイセンが目立ちます。スイセンは普通、daffodil ですが、この白いスイセンには、narcissus という名がつけられています。そう、あのナルシスト、自己愛の語源です。

凜とした香りも、人をしゃきっとさせてくれます。



(竹の台 タイガー)

[目次へ](#)